

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第三巻「近世編」を発売して以来、江戸時代の様々な日野の姿を紹介しています。今回は、江戸時代後期の藩財政の窮乏と、それを支えた地域の事態について紹介します。

藩財政の窮乏

近世中後期になると、諸藩の財政状況は次第に悪化し、幕府や藩の支配にほころびが出始めるようになりました。

藩財政が悪化した原因は、大名たちに義務付けられた「参勤交代」制度にありました。大名たちは、妻子を江戸に住ませ、一年おきに江戸と本国を往復するという二重生活をいられており、家臣を引き連れての往来や、華やかな文化が花開く消費都市である江戸での生活は、莫大な費用を必要としたのです。

これに迫りうちをかけたのが、江戸時代中期以降の物価状況の変化でした。18世紀中頃以降、領主

の収入源である米の相場が下落、その一方で諸物価が高騰するという経済状況が続き、幕藩領主の財政を圧迫したのです。

日野地域の領主たちも、例外なく莫大な借金に苦しんでいました。例えば、19世紀前半における仁正寺藩の借金は一万七〇〇両にも上っていたと言われています。

地域が支えた藩の財政

仁正寺藩はこうした事態を打開すべく、文政年間（1818～29）に大規模な財政改革を行いました。

改革を任されたのは、仁正寺村（西大路）の飯島利兵衛、鋳物師村（東近江市）の竹村猪三郎、五反田村（清田）の藤澤茂右衛門ら仁正寺藩の領民八名でした。彼らは、商人として生業を立てるかたわら、庄屋役をつとめるなど、地域のリーダーとして活躍してきた人びとでした。藩財政が悪化し

続ける中、その財力・商才と村政経験が財政改革の切り札として期待されたのです。彼らは侍身分に取立てられて「勝手方」という役職に就任し、藩財政の再建に着手しました。

勝手方は、「組」と呼ばれる担当区域を持つており、それぞれが各組の年貢を収納してより高い相場で年貢米を売り捌くことで藩の収入増加につとめました。藩の資金に不足があるときは、自らの資産を御用金として納めました。

また、藩の会計帳簿を微細に点検し、二四力条にわたる支出削減仕法を考案しました。その範囲は、藩主の外出回数削減・日常の衣服など藩主の家族の生活面における支出の抑制を中心に、藩主親族をはじめとする冠婚葬祭費の削減のほか、細かいところでは書状便数の削減による通信費の抑制、書状の短文化による紙代の節約といった内容にまでおよんでいます。

年貢収納という支配の根幹にかかわる権利を、大名が領民の手に委ねるといふ事態は、仁正寺藩だけではなく、他の大名や旗本の間でも広く行われていました。このことは、大名支配の弱体化と地域社会の成熟が全国規模で進んでいたことを物語っています。

なお、仁正寺藩の努力もむなしく、従来の支出に加え、開国後の物価騰貴や、幕末に向けて増加した異国警衛などの軍役費用がかさみ、藩の財政は好転しないまま明治の廃藩置県を迎えました。



▲写真 藤澤茂右衛門家旧宅（現 大字清田会議所）